連載・植物の不思議を訪ねる旅

第11回

フィールドでの出来事から

東京大学・法政大学名誉教授
長田　敏行

今回はフィールドで実際に経験した出来事を紹介しよう。2015年8月3日はふと思い立って，八ヶ岳の雄峰の一つ阿弥陀岳の南陵周辺に位置する立場沢，広河原沢に単独行を行った。

ヒロハカツラ： 目的は，ヒロハカツラ（*Cercidiphyllum magnificum*）を見ることであったが，そもそもヒロハカツラとはなんであるか？　カツラは第三紀には北半球に広く分布していたが，現在はほぼ日本に限られ，特にヒロハカツラは本州北部のみに生育するという，いわゆる遺存種である。葉の形態が春に紫色の花をつける，植物学的には縁の遠いマメ科ハナズオウ（*Cercis sinensis*）の葉に似ていることが属名に反映していることは容易におわかりいただけよう。そのようなヒロハカツラの特異な分布を知るようになったのは比較的最近であるが，50年前の学生時代のやはり単独行で上記山域の標高2,000m付近で見た記憶がある。そこで，その記憶が誤りないかどうかを確かめるために，その場所へ向かったのである。通常の登山道ではないので，立場沢を遡っても誰にも会わなかった。すると1,800mくらいの場所で，すでに堂々とそびえるヒロハカツラを見ることができ（図-1，2），あたりにはひこばえも見ることができたので，2,000mまでは入らないことにした。実は，その元の場所は藪漕ぎが必要なところで，その帰りにダニにかまれた記憶があるからであり，山から帰ると首筋にアズキ大のダニがついており，取り除くのに一苦労したからである。私がカツラ類にこだわるもう一つの理由は，その落ち葉の甘い芳香に幼児より親しんでいたためである。特徴的なその匂いは暗闇でもわかるし，実に心に安らぎをもたらす香りである。2015年9月にはハーバート大学のアーノルド樹木園で3日間過ごしたが，そこでも経験した。東アジアの植物を集中的に収集している同園には，カツラもヒロハカツラも森をなしており，しかも乾燥しているせいかその落ち葉の芳香は日本においてより強烈であった。雌雄異株であるこの植物の双方とも立派に生育していた。ご興味ある方は，ボストンへ行かれるチャンスを持たれたら，是非訪問されることをお勧めする。

しかし，立場沢で当初の目的がかなったのであるから，そのままだとは本稿も終了ということになるが，懐が深いのは自然である。ふと思いついたのは，その場所が絶滅に瀕しており，保護活動が盛んな高山蝶ミヤマシロチョウ（*Aporia hippia japonica*）の生育地であり，その食草のヒロハヘビノボラズ（*Berberis amurensis*，メギ科）が生育している場所であることである（ミヤマシロチョウ編集委 1983）。急きょ，目的をそちらへ向けることとしたが，ミヤマシロチョウは見ることはできなかった。ところが，あたりに昆虫図鑑で見慣れ，昨今とかく話題に上るアサギマダラの群舞があるのではないか。そこで，対象をもう一度そちらへ向けることとした。

図-1　ヒロハカツラ

図-2　立場沢のヒロハカツラ

アサギマダラ： アサギマダラ（*Parantica sita*）の頭数は20頭を超え，食草のイケマ（*Cynanchum caudatum*，ガガイモ科）の花は満開であり，その周辺での群舞にしばし見入った（図-3）。アサギマダラは近年その2,000kmを超える渡りが注目されている蝶であり，多くの人々がその行方を追跡している。蝶の渡りは，「海を渡

図 -3　アサギマダラ。イケマの花に群れている

る蝶」（日浦勇 2005）によって葛城山でイチモンジセセリ（*Parnara guttata*）の集団移動が気づかれて以来注目を浴びたのであるが，記録では戦前からあるようである。アサギマダラの追跡もその日浦により組織化が行われた結果，鹿児島で観察された個体が奄美大島で観察された。いったん捕獲された個体にマークをつけて放すことによって行うマーキングの産物である。その結果，台湾でマークされたものが，本州で観察され，日本列島において南から北へ，また，北から南へ追跡している人もいる。立場沢の 1,900m 地点で出くわした個体は，捕虫網も持っていないので，マークは確認できなかったが，眼前のアサギマダラが大挙して 2,000km 南へ飛翔することは想像できた。

八ヶ岳の高原にアサギマダラが広く観察されていることは知っていたが，それが標高 2,000m 近いこのあまり人の来ない場所に群舞を見たことは，自然の妙としてそれだけでうれしくなった。また，それを余人に告げることは意味があると思い，メモを残しておいたことが，本稿のきっかけとなった。さらにあたりを見回すと，そこにはミヤママタタビ（*Actidinia kokomikta*）の特徴的な葉の上半の白まだらがあり（図 -4），また，その近くには可憐な黄色いタマガワホトトギス（*Tricyrtis latifolia*）（図 -5）が咲いていた。

最後に，フィールド調査を専門とするわけではない私としては，この稿をお伝えするにあたり，再現性があるかどうかを確認するために 2017 年 8 月 9 日には再度この場所を訪問したのでその記事を加える。今回は，ミヤマシロチョウも見ることができ，イケマに群れるヒョウモンチョウ（*Brenthis daphne*），キアゲハ（*Papilio machaon*）も見ることができたが，今回は 1,600m 地点でヒヨドリバナ（*Eupatrium japonicum*）

図 -4　ミヤママタタビ

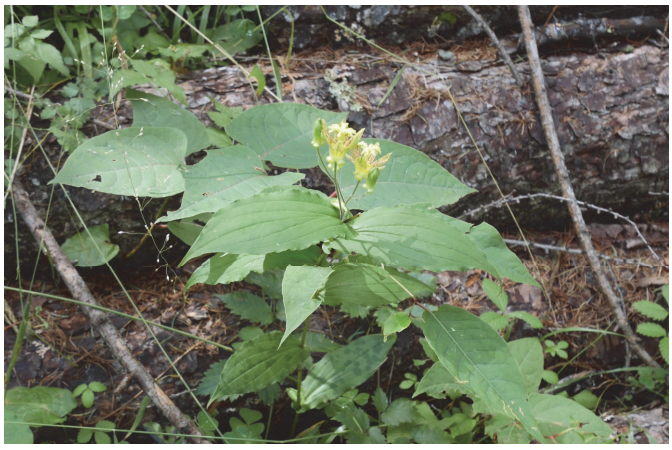

図 -5　タマガワホトトギス

に群れる少数のアサギマダラを見ただけであるので，その場所の特徴を示すためには，繰り返しの観察や定点観測が必要であることを再認識した。なお，このようなことをお伝えする際には，場所の特定は必須の要件ではあるが，今回は絶滅危惧のミヤマシロチョウの繁殖地であることもあり，その場所をぼやかしていることは許されたい。より詳細をという方には個人的にお伝えするので，お問い合わせください。

これまで，私はイチョウを語り，メンデルを語ってきたが，今回の話はその筋からは外れており，いわば閑話休題のような内容になったことは，一つの息抜きとご理解いただけたらと思います。

文献

ミヤマシロチョウ編集委員会 1983. ミヤマシロチョウ，諏訪清陵高校
日浦勇 2005. 海を渡る蝶，講談社学術文庫